

## 各学科・専攻学修状況の報告（4）初等教育学専攻の学修状況

○森 初等教育学専攻の森です、お願いします。初等教育学専攻は、幼稚園・保育士・小学校教諭というように、人間の基礎づくりをしていく力を身につけさせていく教育内容を充実させていくということで、今年も取り組んでまいりました。



### 初等教育学専攻 26年度の教育

#### 対応力・実践力を持った教育の専門家

乳幼児期から学童期への

人間の基礎作りの教育ができる人材の育成を行う

知と省察力をもとに自らの人間性を磨き  
実践力を高めながら  
理論と実践の往還が図れる教員の育成

理論と実践を往還させる…「人間理解の力」を高めること  
…学び、学び合いの実践活動に取り組むこと  
教育の今日的課題に即した  
…現場対応力と授業を創造していく力を身につける

人間の基礎づくりをしていくことのできる人材とは、人間の基礎は人間らしくすること。人間らしい人間を育てる力を持つこと。学力を身につけさせていける力を持つことの半分半分の力を総合して、人間らしいというか、人間の基礎がつくられていくという両面の力を養っていくということで、私どもでは、それを支えていく力は幅広く人間を認めていける人間性、そして、今、集団で学修をしておりますが、集団のなかで自分の力を発揮できる社会性、そして、常に自立をしていけるような向上心を大きな三つの柱として教育目標といたしました。このことは、これから教師の専門性を磨いていく上でも大きな目標となっていくと捉えて、教育を進めております。

### <初等スライド1 教育内容>

そのために、私どもは「EGG プラン」という体系的な教員養成のプログラムをつくりました。それにのっとりながら教育を進めております。その「EGG プラン」には三つのプログラムを組み込んでおります。その三つのプログラムについてどのように進めていくのかということですが、このプログラムは前々年度から取り組んでおります。

## 4年間の体系的な教員養成プログラム(EGGプラン)

- ・理論知と実践知の往還の学び
- ・実践活動を通しての人間理解  
現場対応力と授業の創造

### 3つのプログラム

1. 養成課程の学修プログラム  
(理論と実践の往還)
2. 専門性を高めるプログラム  
(実践を通じた人間理解力)
3. 就職対策プログラム  
(教師力の高揚)



### <初等スライド2 EGGプラン>

これを進めていくにあたって、昨年この会で、教師の専門性ということに対してご指導をいただきました。教師の専門性をどのように捉えて指導するのかということであり、それは専門性を高めるという課題であります。

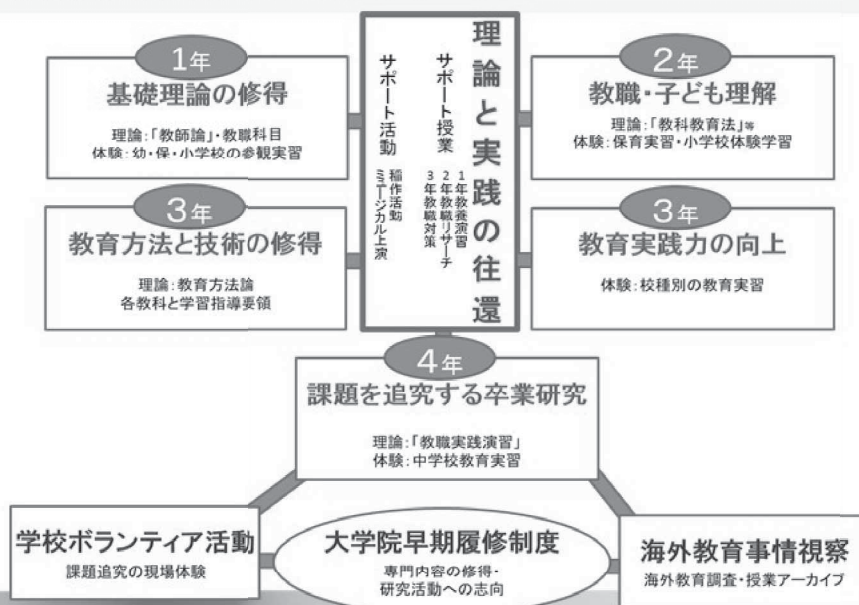
専門性というのは、目に見えない一つの言葉です。では、何が身についたら専門性といえるのか。そのあたりのことを学生も明確に、自分なりに意識する。もちろん教師は、それを明確にイメージして、そこに向かって育てていくわけです。

そのために、この三つのプログラムにしております、1年生から4年生までの机上の学修と実践とをどのように往還させながら学ばせるか。その「往還」というところ、この図（スライド2）で言いますと、この真ん中の部分です。私たちは、このように設定しておりましたが、ここがうまく機能していない。つまり、往還をさせていくことによって、授業を受けて、現場に行って、さらに、授業を受けて高めていくわけですが、学生自身が往還していただくだけの思考もまだ育っていなければ、

あるいは、私どもは往還の場を設定することが一番大事なことではないかと捉え直しました。そして、専門性を高めていくために学校体験、そして、現場を踏むということ。その場を具体的な時間のなかで設けていく。体験を、段階を踏みながらおこなひ、成果・課題を明確にしていく取り組みが必要ではないか。

## プログラム1 理論と実践を往還させる学びの課程

理論学習と教育現場体験活動の両輪的修得により、理論と実践とを往還させながら、専門性の習得を自覚しつつ学ぶ学習体系を仕組んでいます。



### <初等スライド3 学修プログラム>

例えば、これ（スライド3）は学校体験を1年生から4年まで高めていってやるわけですが、1年でやったことが、どこまで身について2年にいったのか。2年でやったことをどのように3年に結び付けるのか。このあたりのことを明確にしていく、いわゆる往還させていく場と内容について取り組むことで進めてまいりました。

さらに、私どもは「特設活動」を設けております。これまでは学校教育を進めていく学生は、稲作体験活動というものを設定して、それに加わりながら、というゆるやかな感覚でございました。ミュージカル上演についても、子ども発達の学生はミュージカルに取り組みますが、これをどちらか、学校教育の学生は稲作に取り組む、

## プログラム2の1 専門性を高める 学校現場の段階的体験

教育現場体験を段階的発展的に実施して、現場対応力・人間理解力を養っています。

### 1年次：学校参観と体験学習

幼稚園参観体験 ・ 保育所参観体験 ・ 小学校参観体験

### 2年次：学校体験学習

小学校での体験学習（1週間）

### 3年次：学校体験学習・小学校教育実習

遠地教育体験（3日間）・幼稚園実習（2週間希望者）  
小学校教育実習（4週間）

### 4年次：中学校教育実習・ 学校ボランティア

中学校での教育実習（2週間）  
放課後活動に参加 指導補助



学校体験学習

「放課後学びの教室」ボランティア活動

4

<初等スライド4 教育現場体験>

## プログラム2の2 専門力を高める「特設活動」体験

意図的体験活動を組み込み、生産活動力・人間理解力・  
集団学習力 企画運営実践力を養っています

・稲作体験活動・生産活動力 計画運営力 人間理解力

自然理解・利用と生産活動 米作り一環の企画と運営と労力

・ミュージカル上演活動・企画運営力 身体表現力 人間理解力

事業一環の遂行 保護者・地域人との対応力 一体・連帯の感動

・100時間自主体験活動・自主自立の力 社会性の高揚

学校ボランティアの理解 自学自習力 貢献力

氏名	学年	活動内容	実施日	実施時間

5

<初等スライド5 特設活動体験>



子ども発達の学生は、ミュージカルに取り組むというふうに、確実に、そこに足場を置かせる。置かせたら、では、そこで何を得たのか。どのように段階を踏んで高まっていったのか。総括の場が必要です。総括がきちんとなされていないと、自分は意識しなかったけれども、「ああ、そういうふうに力がついたのか」と指導者側から教えていく場もあるかと思えます。それらを確実にやっていく。

それが今年、特に取り組まなければいけないと考えて、私どもが取り組んだ専門性への取り組みへの道です。

### プログラム3 教師力の高揚 就職対策

**基礎学力、専門力の定着・汎用力を1年次から継続的発展的に身につけ、就職試験に適応できる力を養います。**

**1年次：基礎学力（一般教養）の定着**

授業科目として文化創造学基礎（国語・社会・数学・理科・英語）  
長期休業課題学習

**2年次：教職教養の系列的学修**

授業では 専門科目についての PDCA学修 オフィスアワーでの指導と確認

**3年次：5教科の基礎と発展的知識の学修**

授業時間内に採用試験対策講座の位置づけ  
基礎学力復習としての授業科目「発達文化 国語・社会・理科」の位置づけ

**4年次：教員・外部講師の対策講座の設定**

7月まで 継続と発展による教職教養・小論・面接練習  
9月以降 学校現場の今日課題に対応していく実践的講座と演習

身に付けていく専門力の自覚化  
学年次ごとに

学修状況(4)  
初等教育学専攻

#### <初等スライド6 就職対策>

そこで、もう一つ、そのようなことをしていくことによって、最後の出口である就職が確実になるだろう。確実にしなければならないということで、プログラムのなかには、就職（出口）への道筋も組みながら進めております。このことは、今年、特にできたと言えるのは、1年生から順番に高めていくわけですが、2年生、3年生になったら急いで就職活動をする、学修をするというのではなくて、1年次から確実に自覚させていく。そして、どのように自覚させていくように進めたのかというと、長期休暇の前に課題等を出します。その課題を明確に示すことと、その確かめをするといったことで取り組んでまいりました。

実際の取り組みの状況につきましても、往還の場、つまり、学生の専門性へのモチベーションをどのように高めていくのか。このことに対して、実際にどのように行うのかということで、今年やってきましたことは、1年次は「教養演習」が

あります。私どもの専攻では <初等スライド7 実際の取り組み状況> 年間を通して「教養演習」という時間を1時間設定しています。

この場で、最初の科目の系列、今年はナンバリングがきちんとできていましたので、授業の位置を確実にまず理解させていくこと。それから、授業の受講・復習等の仕方等の指導をする。それから、現場体験の行く前の指導と、行ってきてからの確認を確実に進める。年間30時間の時間があります。アドバイザーを中心にしながら、一つ一つの過程を得ながら、どこの位置に自分が到達しているのかということを確認していくことが授業と現場とを往還させていく一つの間である。この時間を大事にしていくということの取り組みを行いました。

2年生は「教職リサーチ」という時間が年間を通してあります。3年生は、「就職対策」という学修時間を年間を通して設けております。これらの時間を使いながら、それぞれの学年に合わせて、自分が今やっていること、やってきたことを確認することで、何の力が足りないのかということを確認させていく取り組みをする。

例えば、(スライド8は) この一つの取り組みの例ですが、教育現場で実習してきた1年生の段階では、このような項目で自己評価する。「実習3」というのは3年生ですが、3年生でしたら、このようなことで評価する。そして、さらに実習に行った先の学校の先生からも外部評価として、自己評価に併せて外部の先生はどのように評価をしてくれているのかということで、その評価を学生自身も確認しながら進めていくわけです。

## プログラム2の取り組み状況 「往還」と「段階」を軸に

### 段階を踏まえ、到達事項の蓄積の自覚化を図る

#### 到達事項と自身の段階を確認できる評価

体験 1 の評価項目	評価	体験 3 の評価項目	評価
教師としての身なり態度 はっきりした挨拶	A B C D	状況判断と教師への働きかけ	
学生間の協力姿勢		学生間での積極的行動	
児童への話しかけ		教壇にたつての基本対応	
指導者としての意識		児童の特性に応じた関わり方	
指導教員の所見 (実習体験学校の教員による所見)		指導教員の所見 (引率教員による所見)	

8

<初等スライド 8 評価項目>

## プログラム2の取り組み状況

### 段階を踏まえ、到達事項の蓄積の自覚化を図る

#### 外部教員による評価の例

		身なり態度	学生間の協力姿勢	子どもとの関わり	指導者意識	平均	
A小学校	5人	学校教育専修 A学生	4	3	4	3	3.5
		学校教育専修 B学生	4	3	4	3	3.5
		子ども発達専修 C学生	4	4	3	3	3.5
		子ども発達専修 D学生	3	4	4	4	3.8
		子ども発達専修 E学生	3	3	3	3	3.0
B小学校	5人	学校教育専修 F学生	4	3	3	3	3.3
		学校教育専修 G学生	欠席				
		学校教育専修 H学生	4	3	4	4	3.8
		子ども発達専修 I学生	4	3	3	3	3.3
		子ども発達専修 J学生	4	3	3	3	3.3

9

<初等スライド 9 評価例>

しかし、この表（スライド 9）を見ていただく限り、「1」「2」「3」「4」の 4 段階で評価してもらうようになってはいますが、いずれも「4」が多いです。それは自分の実態が見えにくいということがいえるかと思えます。

つまり、外部の先生ですので、あまり細かく「こういうところを見てくれ」ということも言いづらくて、大まかな項目で示してチェックしてもらっています。果たして、これが本当に学生の自分の専門性へつながっているのかどうかを考えると、これは少し問題があることを年度末に思いました。

プログラム2の取り組み状況		達成度を自己評価 平均値
1 年	授業への出席(遅刻・理由のない欠席)	60%
	提出物に対する確実さ	75
	受講授業に対する復習姿勢	55
	専攻仲間との親交	95
	稲作等、集団活動への垂範意識	40
2 年	授業への出席(遅刻・理由のない欠席)	65%
	公欠の補い	80
	レポート等提出物への確実な提出	50
	自主学习時間の確保	55
	受講した教職科目の位置の理解	55
	話す力・関わる力への努力	95
	集団活動、ミュージカルへの積極参加	80
	就きたい仕事かはっきりしている	60
3 年	授業への確実な出席 公欠の補い	75%
	自主学习・模擬授業実施への時間の確保	70
	教科教育法での学習定着	15
	指導技術への意識的練習 対話力の向上	30
	集団活動への寄与力、持てる力の発揮	70
	就きたい職への明確な目的(育てたい子ども像)	80
	就きたい仕事への達成への計画的努力	60

<初等スライド 10 自己評価結果表>

そして、この表（スライド 10）、これが一番大きな取り組みの最後の評価です。1月の末におこないました。下線がひいてあるのは、少し達成度が低いと思っているところです。それぞれのアドバイザーによる年間を通した授業、実践との往還ということのなかで、どのように自分の姿を評価しているのかという自己評価の結果表です。

一番低いところは、3年生の「教科教育法での学習定着」、これはどのように聞いたのかと言いますと、例えば、教科教育法は、国語から図画工作、体育、家庭科まで全て修了しています。修了したなかで、例えば、教科による特色。国語の教科は、



このような特色を持つ。理科は、このような特色があるということが、ある程度、自分で特色が挙げられるのかということに対して、(評価が)本当に低いです。

このあたりを見ている、自分が焦点化して教えていけるだけの専門性は、まだまだ低いということ、私も強く反省をし、この反省をもとに、また専攻のなかで、次年度どのような取り組みをしていくのかということを考えていかなければならないと思っております。

そして、最後です。では、専門性がきちんと身につけて、出口への就職はどうかと言いますと、やはり非常に課題が多いです。

このことについては、沖縄教育カレッジの宮里先生からどのような取り組みをしていくのかということをお聞きいただきました。専門性を高めたということが、最後の出口に結び付いていくという方向で教育を進めていかなければならないということ。学生の姿を見ている、やはり採用試験に受かる、受からないという課題もあるのですが、本当に教師の姿というのは、一つは受かることが一つの大きな出口ですが、自分が本当に教壇に立っていこうとする自覚がどのようにできているのか。そのあたりへの自覚を、もっと図っていかなくてはならないと。

現状の学校で、今、例えば、言語力の育成や伝え合う力を養うなどと言われて久しいです。ずっと言われ続けていながらも、なおかつ言語力や伝え合う力が不足している。

では、そのなかに自分が入って行って、どのように指導しているのか。学生自身、そのことをどこまで自覚できているのか。このようなどころからしっかりと見つめ直していくことがとても大事なことで、今の3年生、2年生の学生を見ながら反省しています。

どのように専門性の導きをするのかということの取り組みをしながら、具体的に取り組んできたことはあるのですが、大きな成果に結び付いたとは言えないことを、次年度に続けていかなければならないと思っているということをお伝えして、初等教育学専攻の報告といたします。

○司会 ありがとうございます。続きまして、「文化創造学専攻および遠隔教育の学修報告」を専攻主任兼遠隔教育通信部長の久世より報告させていただきます。

## プログラム3の成果課題 26年度卒 4年次生の進路

子ども実習コース	進路	学校教育コース		
1	静岡 幼稚園	1	岐阜県 講師	
2	静岡 幼稚園	2	27年度正規教員	
3	岐阜市 保育所	3		
4	石川 保育所	4		
5	輪島市保育職員	5		本学大学院進学子定
6	石川 幼稚園	6		岐阜大学大学院進学子定
7	横浜市 幼稚園	7	静岡 講師	
8	一宮市 幼稚園	8	27年度正規教員	
9	関市 保育所	9	岐阜 講師	
10	富士宮 保育士	10	静岡 講師	
11	若草幼稚園	11	岐阜 講師	
12	児童養護施設職員	12		進学
13	福井市 幼稚園	13	静岡県○	本学進学
		14	岐阜 講師	
		15		家庭
		17	福山 講師	
		18	名古屋市 講師	
		19		進学子定
		20		新潟県市 職員 岐阜講師
		21	27年度正規教員	
		22	岐阜 講師	

<初等スライド11 4年次の進路>